



北海道ポーランド文化協会誌
「ポーレ」第106号 別冊

本会は今年で創立35周年、例会も記念すべき第100回を迎えました。創立当時は、ポーランドで「連帯」運動が高揚し、「POLE」誌上でも毎月ポーランドの政治・社会情勢が伝えられていました。今回のウクライナ危機では、隣国ポーランドが支援の最前線に立っています。事態が正義と人道に基づいて一刻も早く解決されることを願っています。 会長 安藤厚



第100回
例会



18:30 お話
19:00 ビデオ鑑賞会
21:00 交流会

2022.6.1 札幌エルプラザにて

■ ■ お話 ■ ■ 池田光良氏をご紹介します

博士（工学）、技術士（応用理学）、APEC エンジニア（Civil）



地下水技術者。資源、土木、環境、防災等地下水に関わる分野の調査解析を行っている。日本地下水学会誌編集委員、『地下水用語集』編集委員、同学会地球温暖化検討委員等を歴任。受賞歴：日本地下水学会功労賞、国土交通省優良業務表彰3回（千葉県小塚山、釧路湿原の保全）。著書（共著）：新・名水を科学する、地震による地すべり災害。札幌映画サークル、北の映像ミュージアム会員。映画歴66年、2700本。



映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』と

その背景

池田 光良

近年、本作および『DAU. ナターシャ』『DAU. 退行』『スターリンの葬送狂騒曲』『国葬』『粛清裁判』さらには数本のドキュメンタリーなど、ウクライナ・スターリニズム関連映画の公開が相次いだ。2014年、ウクライナで親ロシア派のヤヌコヴィッチ政権を倒した「ユーロ・マイダン革命」とそれに対する報復としてのロシアのクリミア侵攻、これに対し映画人が強い危惧を示したためである。その懸念が不幸にも今回の「ウクライナ侵攻」へと繋がってしまったのは残念である。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の劇中劇「大審問官物語」は共産主義国家の成立とスターリンのような独裁者の出現を予言したものと見なされてきた。ウクライナ侵攻を命じたロシアのプーチン大統領も、スターリンとは程度の差こそあれ、大審問官タイプの政治家であり、今回のような事態を招くのではと懸念されてきた。

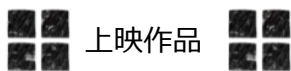
ウクライナはヨーロッパ有数の穀倉地帯であり、南は黒海に面して不凍港を有し、政治的緩衝地帯であるため昔から紛争等が相次いだ。その最たるものは1932～33年のホロドモール（スターリンが穀物を輸出専用としたために生じた人為的大飢饉）であり、進化論・遺伝学に反した“ルイセンコ学説”による農業政策が行われたことが飢餓を助長した。

その後、5か年計画と農業集団化の強行、ホロドモール隠匿などのため、1937～38年をピークとして科学者（ランダウ）や芸術家（メイエルホルド）を含む多数が粛清の嵐に巻き込まれた。

『DAU』シリーズは、ソ連最高の科学者であるランダウ（ノーベル物理学賞）のウクライナ時代以降の純粋科学を守る闘いと投獄、苦悩と反骨の精神を背景としたフィクションで、狂気とリアリティー、情報管理社会の恐怖に私は強い衝撃を受けた。公開された2本だけでも8時間30分、「史上最も狂った映画」と呼ばれ、ロシアでは上映禁止である。

さらに『国葬』『粛清裁判』ほどロシア社会の洗脳の厳しさを明確にした作品は過去には見られない。今回の事態があっても、なぜプーチン政権が高い支持率を保っているのかを考えさせる。

また、ランダウ関連本を読むと表現や学問の自由への困難さが良く分る。2014年の特定秘密保護法施行以降、研究発表時における守秘義務の壁が年々厳しさを増しつつあり、上述の作品群は私には人ごとではなく、ウクライナの状況と全く無縁ではないと感じている。真実の解明のために闘った本作の主人公ガレス・ジョーンズやジョージ・オーウェルの生き様から何かを汲み取っていただければ幸いである。 (いけだ・みつよし)



赤い闇

スターリンの冷たい大地で

ソビエト連邦がひた隠しにした歴史の闇を照らし出す衝撃作！
実在したジャーナリスト、ガレス・ジョーンズによる告発の物語

■ 2019年製作 | 118分 | PG12 | ポーランド・イギリス・ウクライナ合作 | 原題：Mr. Jones

■ 2019年 第69回ベルリン国際映画祭コンペティション部門出品



登場人物 (左から)
ウォルター・デュランティ
ガレス・ジョーンズ
エイダ・ブルックス

ポーランド映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』は、スターリン体制にひとり立ち向かったジャーナリストの実話に基づく歴史ドラマ。ソ連の過酷な収奪・弾圧と徹底した情報統制の実態が暴かれる。

英国人記者ガレス・ジョーンズは、世界恐慌の嵐のなかソ連だけがなぜ経済的繁栄を誇っているのか？ これは共産主義成功の証しか？ 疑問をもち、取材のため単身モスクワを訪れ、ウクライナ潜入を試みる。嚴重な監視のなか、彼は母が暮らした土地にたどり着けるだろうか…

映画で描かれる1932～33年ウクライナにおける(食糧徴発による)人為的大飢饉(ホロドモール)では、400万～700万人強が餓死または強制収容所で死亡したと推定され、スターリンによる「ウクライナ人に対するジェノサイド」として十数カ国が認定している。

■ 主な登場人物

- ・ガレス・ジョーンズ: 主人公。ロイド・ジョージ英国首相の外交顧問、ヒトラーへの取材など華麗な経歴をもつ若き英国人記者
- ・ポール・クレブ: モスクワにいる彼の友人記者。「大きな情報をつかんだ、想像以上に厄介な状況だ…」と電話で伝えるが、突然消息を断つ。
- ・ウォルター・デュランティ: ピューリッツァー賞受賞記者。ニューヨーク・タイムズモスクワ支局長。ソ連に同調し大飢饉の事実を否定する。

アグニェシュカ ホランド

■ Agnieszka Holland 監督

1948年ワルシャワ生まれ。プラハで映画制作を学び、70年代からアンジェイ・ワイダ運営の映画ユニット「X」に所属しワイダ作品の脚本も手掛ける。1980年、国際映画批評家連盟賞受賞。



- ・エイダ・ブルックス: ニューヨーク・タイムズモスクワ支局の女性記者。ナチス・ドイツから逃れソ連に期待を賭けたが…
- ・ジョージ・オーウェル: (映画の時点では) 新進作家。後に、スターリン体制を痛烈に批判した風刺小説『動物農場』(1945)、全体主義的ディストピアを描いた『1984年』(1949)などで有名になる。『動物農場』の農場主の名前が“ジョーンズ”なのも興味深い。

翌年の戒厳令を機に西欧に移住。86年アカデミー外国語映画賞ノミネート、91年『僕を愛したふたつの国～ヨーロッパ ヨーロッパ』でアカデミー脚本賞ノミネートなど、世界中を舞台に活躍している。

photo by Slawek 2011/9

(文 氏間多伊子)

【入場無料】 申込み先↓ (必須: 氏名・連絡先をお知らせください)

☎ 011-384-5984 (園部、Fax 共) / ✉ hokkaidopolandca@gmail.com

※会場が休館となる場合は延期または中止します。
感染防止のため手指消毒・マスク着用をお願いします。

※今後、取り上げてほしいポーランド映画がありましたら、ご意見、ご要望をお知らせください。